

琉球大学学術リポジトリ

記号とメッセージ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学国際地域創造学部国際言語文化プログラム 公開日: 2024-04-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ホセ, マリア メリーノ, 鈴木, 正士 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002020278

記号とメッセージ

ホセ・マリア・メリーノ著
鈴木正士訳

エドゥアルド・ソウト准教授をモヤが見かけたのは、季節が秋に変わったばかりのある朝のことだった。猫のために缶詰を購入したモヤは、修理を頼んでおいた腕時計をマドリッドタワーにある時計屋に引き取りに行くため、スペイン広場を突っ切ろうとしていた。そのとき、ふと目にした野宿するアフリカ移民のなかに、男はいた。褐色の肌をした移民たちとは対照的に、ひとり髭だらけの赤ら顔の男はいやでも目についた。モヤはそばまで行くと、本当にその男が古くからの友人であるソウトか確かめようと、注意深く観察した。男はまちがいでなくソウトだった。

大学から突然蒸発したソウト准教授は、架空の物語に主人公として登場するような、一風変わったホームレスに変わり果てていたのである。長く伸びたソウトの髪はからまり合っていた。ダンボールの上に座って、ソウトはセルバンテスの銅像をぼんやりと見上げていた。

「ソウト先生」とモヤはソウトに呼びかけた。モヤはソウトとの再会を喜んでいて。しかし一方で、仲間との関係を断って生きることを選択したこの男の気持ちを考えると慎重に振舞わなければ、と思った。

ソウトは眺めていた銅像から視線をモヤに移すと、無言のままじっと彼をみつめていたが、やがて、彼がだれかわかったという顔つきになった。

「ああ、編集者のモヤだったか」とソウトは、言葉を区切りながらゆっくりと言った。「その節はいろいろ世話になったね」

ソウトは汚れたぼろぼろの服を着ていた。彼は明らかに常軌を逸していた。モヤは心が痛んだ。ソウトはかつて几帳面できれいな好きな性格の研究者として、仲間うちで知られていたのだ。モヤはソウトをこの場所から連れ出そうと考えた。

「ぼくの家に来てください。風呂に浸かって、服を着かえてください」と彼は言った。

しかしソウトは座っていたダンボールから立ち上がろうとはしなかった。そんな親切は虚栄心やうわべだけの優しさに過ぎないと言いながら、蔑むような態度でモヤの申し出を拒絶した。

「だけど、ここで寝ているんですか？」とモヤはソウトに訊いた。ソウトの様子にモヤはますます哀れみをおぼえた。

「わたしは空気のように軽やかなのだ」とソウトは答えた。「昨夜はここで寝た。明日はどんな場所で目を覚ますやら」

「食事は？ 何か食べたのですか？」。いたたまれなくなったモヤは思わずソウトに尋ねた。

「いや、何も」とソウトは答えた。「今日は何も口にしていない」

二人はフラビオの店に行った。フラビオはソウトを見ると不快な表情をした。ソウトはミルクとトルティーリヤを挟んだボカディーリョしか頼まなかったが、よそよそしい冷淡な態度は少しやわらいでいた。

「わたしがあまり幸せではないと思っているとしたら、それは君の誤解だ」とソウトは、やっと食事でありつけたという素振りも見せず、ゆったりと食べながら言った。「以前より心はずっと満たされている。講義や会議に煩わされることもなく、研究に専念できるからね」

そして一息にミルクを飲み干すと、お代わりをした。

「研究？ 研究って、どんな？」とモヤが訊いた。

するとソウトの瞳に、かつて激しく燃えていた情熱の閃きがのぞいた。

「話せば長い」しばらくして、ソウトはやっと語りはじめた。「ある日音素の研究に嫌気がさしたわたしは、自然のなかのさまざまな音を分析しはじめた。動物の鳴き声や水のたてる音に耳を澄ませた。それぞれに文法があった。さらにわたしは、岩石の形状や、浸食による岩石の凹みや窪みについても考えを広げた。それぞれが記号であり、それぞれがメッセージを発していた。肝心なのは、意味を見つけることなのだ。だが、現代の欲望社会は、経済優先の金儲け主義に沿わないものなら、どんなメッセージだってすべて跳ねつけ追いやってしまう。そうすることで、自分たちを葬る墓穴をどんどん深く掘り進んでいるというのに。しかし実は、この世界はもっとほかのさまざまな記号であふれかえっているのだ」

ソウトが生氣を取り戻してきたのがモヤにはわかって、モヤの気持ちもなごんでいった。

「詩はどうです？ 書いていますか？ 以前出版した先生の詩集、とても良かった。500部も売れたんですよ」

「詩だって！」とソウトは叫んだ。「詩なんて、今では輝きを奪う最たるものだよ。詩がこの世界に光を当てるなんて、とんでもない！ 知ったかぶりしたニセ詩人たちは偉そうにしているけれど、なにが輝きだ！ 真実の詩人は何百年も前にみな死んでしまったよ！」

ソウトはテーブルを指でたたいた。まるでソネットの音節を数えるように。そしてきっぱりとこう言った。

「詩が表す言葉は空っぽの排水溝になり果てた。詩なぞにわたしが興味を持つことなど、金輪際ない」

モヤはなんとかソウトを出版社まで連れていった。ビルの地下にある出版社のオフィスに入ると、ソウトは驚いた様子であたりを見まわした。

「覚えていないんですか？」とモヤが訊いた。

「覚えていないわけがない」とソウトは答えた。「ここは〈新科学〉の本部が置かれた場所だ。反フランコ集会在、夜間よくこの場所で開かれたものだ。異端審問のようなことが、少なくともこの場所で幾度も執行された。あの時代も暗い時代だった」

モヤの飼っている何匹もの猫がどこからか這い出してくると、モヤのまわりを集まり、甘えるような態度で彼に身体をこすりつけた。

「この猫は？」とソウトが訊いた。

困りきった様子でモヤは、みんな捨て猫なのだ、と言った。

「こいつは虐待されていたみたいで、拾ったときは傷だらけでした。そいつはオートバイに轢かれていました。最初に拾った猫です。そのあと見つけると連れ帰り、今ではこんな状態です。猫にだって生きる権利はありますから」

猫たちは、モヤが餌の缶詰を開けているあいだ、ニャーニャーと声をそろえて鳴いていた。

「ほら、言ったとおりでらう」そばにいた猫の背中を撫でながらソウトは言った。「このメッセージの意味は明白だ。空腹、腹ぺこ、それとも、すきっ腹だ」

「それで今は？」とモヤが訊いた。「今は何をしていますんですか？」

その瞬間、ソウトの身体が今日出会ったときのように強張った。ああ、早まった。ソウト先生は打ち解けてきていたのに、もうおしまいだ、とモヤは思った。しかし、そうではなかった。ソウトは少し黙っていたが、破れかけたポケットに手を突っ込み、数枚の紙を取り出すと、それを机の上に置いた。紙にはどれも殴り書きのようなものがボールペンで記されていた。

「これが何かわかるかい？」

モヤは困惑した表情をした。

「壁の落書きだ。どこにでもあるだれが書いたかわからない、いたずら書きだ。わたしはこの限界で見かける落書きの目録を作成している。出現しつづける新しいものを書き留めては、落書きの変遷をたどっている。最初の落書きは意味不明の単語だった。ミラ、ダルド、ホットライン、ティッチェル。それから、特定の名前が現れはじめた。トンキイ、ファン・マヌエル、イシドロ。そして、正確な日付も明記してあるが、1990年の春、判読不能な純然たる二つのタイプの落書きが現れた。一つは丸みを帯びた形をした落書きであり、もう一つはのこぎりの形をした落書きだ。デザイン

画と呼んでもいい芸術的な落書きと、ただ暇つぶしに書いた下手な落書きという風に分類できるかもしれないが、説明すると長くなりそうなので、ここでは省略する。その後、また別のタイプの落書きが現れた。その落書きには当時まだ知られていなかった新しい特徴が見られたため、わたしは当惑した。にもかかわらず、新たなタイプと考えるそれらの落書きの起源をわたしは特定できた。あるものはシボネイ族の文字や絶滅した満州語の文字を思い起こさせるものだ。またあるものはオリヤー語を髣髴させる。アラビア語風に書かれている落書きもあるが、それがもっとも目立っているというわけではなく……」

ソウトはホームレスになっても、言語学者としての情熱を失ってはいなかった。餌を食べ終えた猫たちはそれぞれの居場所に戻ると、弁舌をふるうソウトを息を殺して見守った。モヤは勤勉な学生のようにソウトの話に聞き入った。

「これが、わたしが今取り組んでいる研究だ。資料収集の期限をこの秋と定めている。そのあと本格的に研究に取り掛かり、収集した落書きの意味を探ろうと考えている」

「ご研究が完成したあかつきには、編集者としてぜひお話をうかがいたいものです」。モヤがこう言ったのは、ただソウトを元気づけるためだった。ところがソウトは誇らし気にきっぱりとこう答えた。

「出版なんて考えていない。本にしようなんて思ったこともない。君も知ってのとおり、わたしは虚栄心や嫉妬心から他人の足を引っ張るような学者の世界とは縁を切った。ただ、抑えきれない興味から研究をしているまでだ。研究成果を発表しようなんて、思ってもいない」

そのとき、電話が鳴った。モヤは電話に出ると、しばらく話をした。ソウトはオフィスの奥に入っていた。そこは書庫になっており、出版社が収集した資料や書籍が保管されていた。モヤはかかってきた電話を切ったあと、他との連絡をしなければならず、結局、一時間以上も電話にかかりつきりだった。そのあいだ、ソウトは書庫に入っただけで出てこなかった。

請求書や受領通知書などをモヤが整理していると、ソウトはやっとドアのところ顔を出した。

「この奥に何があったか、とうに忘れていた」とソウトは言った。

「覚えていなかったんですか？」とモヤはにこやかに答えた。「25年を超えるほどの左翼思想の資料。過去の遺物です。世の習いですね」

「こんなにたくさんの本を保管するには、何か配列でももうけたのか？」とソウトは訊いた。モヤは怪訝な目で彼を見た。

「配列なんてあるわけがありません。書籍類は印刷所から来たまんま、棚の空いているところに直行です」

「すべてが不思議な配列で満ちあふれている」とソウトは言った。「本の配列に象徴

的な意味があるようだ。それはまるで、誕生、労働、終焉をつなぐ軸のまわりを、孤独に関するさまざまな考察が連なっていく思索のようだ」

そのとき、モヤにある考えが思い浮かんだ。パソコンの乗った小机を脇へ押しやると、彼は立ち上がった。

「ソウト先生、いいですか。いいえ、とは言わないでください。ここに寝泊まりしてください。このソファにです。お望みなら、この毛布も使ってください。トイレなら書庫の奥にあります。本の配列でも何でも好きなことを研究してください。紙もボールペンも鉛筆もマーカーもあります。道端で野宿する必要などありません」

「君もそろそろ、ぼくが束縛を嫌うこと、わかってくれたらいいのだがね」とソウトは言った。「君はまるで、わたしを墮落へと誘惑する悪魔みたいだ」

「誘惑するなんて、とんでもない。このソファは壊れかかってスプリングがのぞいています。毛布を見てください。猫がさんざんじゃれついたので、こんな有り様です」

「浴室もあるんだろう？」とソウトが糾弾でもするかのように言った。

「浴室ですって？ 言ったでしょう。便器と小さな洗面台があるだけだって。墮落っていうなら、まあ、ささやかな墮落です。しかし少なくとも、ここには紙の置ける机があります。思う存分研究ができますよ」

ソウトは審問官のような険しい表情を崩さなかった。

「施しを受けるのは嫌いだ。中南米でよく言うが、施しが高額だと聖人でさえ用心する」

「施しですって？ 施しなんかじゃありません！ 猫に毎日餌をやってほしいんです。ぼくは家から通わなくてすみます。いい加減うんざりしていたんです」

「今夜はここに泊まる」とソウトは言った。「しかしそれ以上は約束しない」

夕方降り出した雨は本降りになった。ソウトは出版社の狭いオフィスで一晩過ごした。そして翌日も泊まり、結局、一週間そこにいつづけた。しかし、モヤがソウトに会うことはなかった。ソウトは朝早く出かけると、ほとんど一日中外にいた。出かける時にはいつも、ぼろぼろの服の上に軍人用の革のコートを引っかけていった。それはコンテナのゴミ置き場に積まれたヘルメットの奥からみつめてきたものだった。ある晩、モヤは話がしたくてソウトの帰りを待っていた。研究はどんな具合か聞きたかった。

ソウトは11時に帰ってきた。そのときモヤは、猫たちがソウトにひどくなつているのに気がついた。それぞれの居場所からぞろぞろと出てきたのだ。

「まったく姿を見せませんでしたね」とモヤは言った。「こんな時間まで出歩いているんですね」

「外で働いているのだ」とソウトは答えた。「といっても、地下鉄の駅の中で、だがね」

「地下鉄？」とモヤは問い返した。

出版社に初めて泊まった翌朝、最寄り駅であるノビシアード駅のロス・レイエス通り側の構内に、たいへん珍しい落書きを見つけた。そして、同じような落書きを探しては、それらを分析することにまるまる一週間を費やした、とソウトは言った。彼は紙を取り出すと、書き写した落書きをモヤに見せた。机の上のにぼっていた赤毛の猫が額をソウトの手にこすりつけた。

「デリ、やめなさい」とソウトはその猫に言った。そして、落書きの特徴を説明しはじめた。「円形をしており、二つの円周から成っている。一つの円の中にもう一つ別の円が入っている。そして、それぞれの円の二点を線が結んでいる。他に似たようなものがないか、わたしは探した。すると、その記号は地下鉄2号線のほとんどすべての駅の出口近く、床から1メートル50センチメートルほどの高さのところに描かれていることがわかった。それをぜひ君にも見てもらいたい」

ソウトの強い誘いに、モヤは駅まで一緒に行くことになった。ロス・レイエス通り側の入口はもう閉まっていた。そこで二人は、ノビシアード通り側の入口から駅に入った。狭い構内に下りたとき、ソウトはくすんだ黒い色をした円形のしみのようなものを指さした。それは壁から数ミリメートル突き出ている。

「さあ、これだ」とソウトは言った。そして顔をその記号に近づけ、手で撫でながら臭いをかいだ。「少し琥珀の臭いがする。ピロードのようになめらかな肌触りだ。壁の材質のためだとわかってはいる。セメントと石では臭いも感触も違うからね」

モヤは肩をすくめた。それはただ壁を汚した黒いいたずら書きでしかなく、めずらしいものとは思えなかった。彼の目には、それはどこかの目立ちたがり屋が描いた反社会的行為にしかみえなかった。

そのときソウトは、内緒話でもするかのように、こう言った。

「そこのスプレー缶で描いたものではない。しっかり確かめたのだ。まるで刻印したかのようなのだ」

その記号を探しだし書き写すことでソウトは秋を過ごした。そのため、出版社のオフィスは寝室としてばかりでなく、研究室として利用することにも慣れていった。出版社のあるその界限では、ソウトは大学の先生ではなく、〈詩人先生〉として知られていた。モヤがビルの守衛にそう紹介したのだ。夜中であろうと自由にビルに入れてやってくださいと彼は守衛に頼んでいた。またソウトは、甲斐甲斐しく猫の世話をした。彼がそれぞれにつけた名前を呼ぶと、彼らはソウトのそばに寄ってきた。

12月の終わり、ソウトと話していたとき、この頑固者の准教授はあの円形の記号にほとんど強迫観念にも似た興味を抱いていることに、モヤは気がついた。他の落書きに対しては、ひとの目を引くために描いたという、落書きした者の自己満足を読み

取るだけだったが、その円形の記号は、明確な目的を持って具体的な人物に宛てて描かれたメッセージだと、ソウトは思い込んでいた。

ソウトが異常なほど神経過敏になっているのにもモヤは気づいていた。何も口にしていないのではないかと心配したモヤは、時々ソウトに食べ物を持っていった。モヤがカンパとして机の上に置いた金にソウトは触れていなかったのだ。ソウトは、食べ物はいらぬ、猫の餌と一緒に食べているから、と言った。同じ哺乳類に良いものがわれわれ人類に悪いわけがない。それに、わたしは少食なのだ。

モヤは、食べないことがソウトの脳に悪い影響を与えるのではないかと心配していた。

「そんなことより、君、マンダラを知っているかい？」と出版社のオフィスの床一面にたくさんの紙を広げながら、ソウトはモヤに問いかけた。紙にはどれも、地下鉄2号線で見つけてきた円形の記号が書かれていた。「マンダラとは、拡散するものと集中するもの、曖昧なもの明瞭なもの、想像上のものと現実のものが統一された地点へと開かれた窓だ」と言うと、ソウトは視線を上げた。勝利に輝いている彼の瞳には厳肅な喜びがきらめいていた。「この記号は、マンダラを象徴する睡蓮の花の、その芯だ。どんなやり方で描いたかわからないが、何者かが刻印したマンダラを中心なのだ。わたしは記号が表す深い意味をさぐろうと思う。誰がメッセージを送り、誰がそのメッセージを受け取るのか知りたいのだ。すでに資料は十分集めた」

数日後のある朝、ビルの急な階段をくだり、地下にある出版社にモヤが入っていると、オフィスの真ん中でソウトが突っ立ったまま、呆けたようなまなざしで天井を見つめていた。ソウトがデリと呼ぶ猫が彼の肩に乗っていた。

「ソウト先生」とモヤが声をかけた。「どうかしたんですか？」

ソウトは微動だにしないでしばらく恍惚状態にあったが、急に物に憑かれたように話し出した。

「わが友、モヤよ。ついに見つけたのだ。わたし、だったのだ。メッセージの受取人は、このわたしだったのだ」

モヤは壊れかかったぐらぐらする椅子に座ると、腫れ物にでも触^{きわ}るような思いでソウト准教授を見つめた。ソウトは重々しい態度は崩さなかった。ほとんど横柄な態度だった。赤毛の猫が軽やかにソウトの肩を行ったり来たりしては頭でソウトのあごひげをくすぐっていた。ソウトは少し落ち着くと、また話しはじめた。

「数日前の午前3時頃、電話が鳴った。飛び起きたわたしが受話器を取ると、受話器の向こうから、ただ意味のないつぶやきが聞こえてきた。猫が喉をゴロゴロさせるような音だ。混線してかかってきた間違い電話だろうと思ったが、ふと、それはわたし宛のメッセージではないかと思いはじめた。しかしわたしには、それが何を意味するのかわからなかった。その電話は、翌日何度もかかってきたが、毎回猫の喉鳴りのよ

うな不明瞭な音だった。機械音ではなかった。そして今朝、わたしはすべてを了解したのだ」

ソウトは肩にいた猫を両手でつかむと、そうっと床に置いた。そして立ち上がると、時刻を尋ねた。

「10時25分です」とモヤは答えた。「そんなことより、そのあと何があったのか教えてください。途中で話をやめないでください」

ソウトはモヤの鼻先に指をさすと、説教するような口調でこう言った。

「何があったか知りたいのかって？ それならシルバ通りにあるコンテナのゴミ置き場までついて来なさい。歩きながら話そう」

そして、歌曲に取りかかろうとするテノール歌手のように腕を広げると、よく響く雄叫びをあげた。

外はひどく寒かった。モヤはマフラーを首にきつく巻いた。ソウトはしばらく口をきかなかつたが、ルナ通りの坂をのぼりはじめたとき、息を切らしながら、また話しはじめた。息を吐くたび、彼の顔の前に噴水のような白い塊ができた。

「君は真実の言葉であるマントラも知らないだろう。それは生命の息吹きそのものだ。今朝早く電話がまた鳴った。わたしは腕時計をはめていないので何時かわからなかったが、夜が明けはじめたばかりのころだった。猫が喉をゴロゴロさせるような音が聞こえるだろうと思っていた。ところが、今度はマントラがはっきりと聞こえたのだ。オーム、オームと5回繰り返してから、電話は切れた」

シルバ通りのコンテナのゴミ置き場には壊れた窓枠やスプリングの取れたマットレスがあるだけだった。しかしソウトは残念な様子でもなかった。

「早起き連中がもうやって来たのだ。次の機会を待つとするか」と哲学者のような面持ちでソウトは言った。そしてモヤに、コーヒーを飲み連れていってくれと言った。

「わかるかい？ マントラだ。真実の言葉だ。それは数日前にかかってきた電話と関係していると、その瞬間わたしは了解したのだ。さらに、そのメッセージは円形の記号と深いつながりがあると、直感的にわたしは悟った。とうとう、わたしに認識できるメッセージが送られはじめたのだ。幸運にも宛先を間違えずに。わたしが円形の記号をしつこく探索した行為は、宛先不明の返信であり、受領通知書だった。わたしの興味をそそった円形の記号は、わたしの居場所を見つけるために準備されており、記号を探索することで、わたしはメッセージを送ってくる絶対者に返事を書いていたのだ。そしてついにわたしの居場所は発見された。なあ、モヤ。この人の世では、わたしたち誰も他者とひとつになるべき記号なのではないだろうか？ 宇宙に一瞬一瞬の調和をもたらすためにだ。そしてすべての悪なるものは、記号であるわたしたちひとりひとりの関係の不均衡や齟齬から生じるのだ」

「ほんとうに何も食べたくないんですか？ 酢漬けのいわしをはさんだボカディーリョも、チューロスも何も？」

「ひとはパンのみでは生きられない、モヤ、いいかげんに目を覚ませ。それとも、わたしが永遠の真理に近づいていることに気がついていないのかい？ わたしは記号なのだ。そして、わたしという記号を解読するよう、わたし自身が絶対者の興味をそそつたのだ。絶対者がわたしに二つの円を見つけることを仕向けたように」

その夜、深夜4時ごろであった。町は深い夜の底にあった。ゴミ収集車はすでにゴミを集め終わったが、夜明けの街を車が走りだすにはまだ間があった。その時間、モヤの家の電話が鳴った。ベッドから飛び起きたモヤは、電話口に走った。

「何かあったの？」と、戻ってきたモヤに妻が不安げな様子で訊いた。

「何でもない。でも、ちょっと出かける。ソウト先生だった。会社のオフィスで寝ている友人だ。奇妙なことを口走っているんだ」

《これは別れの電話だ》とソウトは言った。《記号の主である絶対者とわたしは話した。まもなくわたしを収集しに来ると、先ほど知らされた。この旅は長くなるはずだ。君とはもう二度と会えないだろう》

こんな思い込みをどうやって解けというのか。人気のない道に車を走らせながらモヤは考えた。いつかどこかの街角であの男は野垂れ死にするにちがいない。栄養失調でか、肺炎でか、半狂乱になってか。それでおしまいだ。出版社への路地に入る手前で車を止めると、モヤは歩きだした。角を曲がろうとしたとき、赤毛の猫を抱えながらソウトがビルから出てくるのが見えた。

「ソウト先生。待ってください」と叫んで、モヤはソウトを呼び止めた。

ソウトは道の真ん中に立ち止まると、微笑みながらモヤをじっと見つめた。明らかにそれは、去っていこうとする者がみせる別れのあいさつだった。モヤはソウトに駆け寄った。

ソウトのいるところまであと数歩というところである。見えない壁が立ちふさがった。さわってもその壁は硬くはなかったし、たたいても手は痛くはなかった。しかし、まるで空気が固体になってしまったかのようで、それ以上ソウトに近づけなかった。

「ソウト先生、どうしたんですか？ 何があったんですか？」

「さよなら、モヤ。いろいろ世話になったね。わたしは自分の記号を探しあてた。君もいつの日か自分の記号を見つけられるよう、祈っているよ。それから、わたしの詩集を再版するなんて考えないでくれ。いろいろありがとう。デリは連れていく。大事にするよ」

驚きのあまり声も出ず、身がすくみ、モヤは身体全体から力が抜けていった。そのとき、ソウトの周囲数メートルに人の息のようなものがかかりはじめ、ソウトの姿を

隠した。そしてその白っぽい息は煙となって徐々にあたり一帯に立ち込め、ついには雲のようなどんよりとした巨大な白い塊となった。その塊のなかをモヤは手探りで進もうとした。しかし、見えない力が彼を押し戻した。それから、その巨大な白い塊は、出版社のビルの向かいのビルまで移動し、ゆっくりとそのビルの壁のなかに溶けていくと、消えてしまった。通りはまたひっそりとした状態に戻った。

白い塊が溶けていった壁には黒い大きな記号が刻印されていた。それは、アルファベットの大文字二文字、逆向きの Y と U でできた記号だった。逆向きの Y の直線の上部に U が重ねられ、下部が二つに分かれた三又のような形になっていた。そして記号の上には小さな印がついていた。それは、もし片方がもう一方より長くなかったら、Ñ というスペイン語文字の上にあるティルデという波形符だった。記号は壁から数ミリメートル突き出ている。壁に近づいたモヤが手を伸ばしてその記号に触れると、それは生暖かった。

やっと家に帰り着きベッドに横になったとき、モヤは激しい悪寒に襲われた。夜露に濡れたせいだろうと妻は言ったが、モヤは、自分が目にしたと思い込んでいる前代未聞の、あの光景のためだろうと思った。あれは荒唐無稽な悪夢だったにちがいない。しかし2日後、出勤すると、壁にはあの黒い大きな記号が描かれていた。拭い取ろうと、ビルの守衛が総出でいくら頑張っても、それを消すことはできなかった。記号はそのまま残った。モヤはそれを見るたび、悲しさと慕わしきで複雑な気持ちになった。その記号は、驚くべき形で蒸発したエドゥアルド・ソウト准教授が残した唯一の形見だったからである。

ある日、モヤは家から一番近い地下鉄の駅に行った。階段を降りていくと、作業員が構内の壁に刷毛で円を描いていた。ソウトが最後までこだわりつづけて収集研究したあの円形の記号だった。

「何をしていますか？」とモヤは作業員に訊いた。

作業員の男はもうひとつ別の円を壁に描くと、手に提げていたペンキ缶のなかに刷毛をつけながら、こう言った。

「消防隊進入口を示す記号を描いているんだよ。この記号はそのうち地下鉄全駅で見られるはずさ」

解説

エドゥアルド・ソウト先生は、短編集 *El viajero perdido* 『道に迷った旅人』(1990) 所収の "Las palabras del mundo" 「この世の言葉」(拙訳が『琉球大学欧米文化論集』第 64 号 (2020) 所収) に初めて登場して以来、荒唐無稽のようにみえる物語のなかの人物であるにもかかわらず、彼には実在感があるようで、読者の注目をあつめ、作者ホセ・マリア・メリーノの創作意欲を刺激し、ソウト先生を主人公にした多くの作品が 2014 年まで発表された。ソウト先生は蒸発したかと思うと別の作品の別の場所に現れるが、謎を残したまま、また消えてしまう。彼が主人公のそれらの作品は、*Aventuras e invenciones del profesor Souto* 『ソウト先生の冒険と発明』と題され一冊の本にまとめられ、マドリードの出版社 *Páginas de espuma* 社から 2017 年に出版されている。

本作「記号とメッセージ」は、*Cuentos del barrio del Refugio* 『避難区域の物語』(1994) に初出のソウトシリーズ 3 作目の作品である。(2 作目は「この世の言葉」と同じ『道に迷った旅人』に収められた "Del libro de naufragios" 「難破船の本について」)

思いがけないときに思いがけない場所に現れるソウト先生は、今回はホームレスとなってスペインの首都マドリードのスペイン広場に登場する。ソウト先生は無一文になっても研究に情熱を燃やしていた。現在の研究対象は壁の落書きであり、それらを収集しては意味を探求していた。ある日、地下鉄の駅にめずらしい落書きを見つける。二つの円から成る記号である。他の落書きに対するのとは違って、この記号に強迫観念にも似た興味を抱くソウト先生は、これは明確な目的をもって具体的な人物に宛てて描かれたメッセージだと考えていた。そして、このメッセージが自分宛てだと了解したとき、ソウト先生は雲のような巨大な白い塊に包まれながら、記号の送り主である絶対者のもとへと消えてしまう。彼が溶けていった壁には、消すことのできない黒い大きな記号が刻印されていた。

ソウト先生がいなくなったあと、彼がこだわっていた二つの円から成る記号が実は「消防隊進入口」を示すマークだとわかる最後のくだりは、一見、落語の下げのようであり、この点だけを見ると、本作はたわいない滑稽譚とみえるかもしれない。しかし、何でもないと思えるもの、たとえば落書きのようなものも一種の記号であり、それらの記号には何らかのメッセージが隠されており、大切なのは記号の発するメッセージを人間が受け止められるかどうかだ、と作者メリーノは言いたいのだ。

メリーノは、ソウト先生に、岩石の形状や窪みも、どんなものも「それぞれが記号であり、それぞれがメッセージを発していた」と語らせる。そして、「肝心なのは、意味を見つけることなのだ」とつけさせる。しかしそれは、次の理由からできていないとソウト先生に言わせることで、作者メリーノは現代社会や現代人を批判する。

「現代の欲望社会は、経済優先の金儲け主義に沿わないものなら、どんなメッセージだってすべて跳ねつけ追いやってしまう。そうすることで、自分たちを葬る墓穴をどんどん深く掘り進んでいるというのに」

ソウト先生のこの台詞は、2012年国民小説賞を受賞した*El río del Edén*『エデンの河』でもエコロジーや福祉の問題など現代の社会問題を主要なテーマのひとつとして取り上げたメリーノの考えを反映している。

ソウト先生や編集者のモヤの暮らす社会では猫が虐待されている。フランコ独裁政権のもと、異端審問のようなことが執行された昔を指して、「あの時代も暗い時代だった」というソウト先生の言葉の言外に、もちろんあの時代は暗黒だったが、今の時代もけっして明るくはないというメリーノの声が聞こえてくる。

一見奇矯な言動をとったあげく途方もない消え方をするソウト先生に、現代社会の深刻な問題を訴えさせることで、メリーノは同時代を強く批判しているのである。

ソウト先生は同時代の問題の原因を、「さまざまな記号であふれかえっている」この世界に生きていながら記号の発するメッセージを受けとめられない人間にあるとする。そして、「この人の世では、わたしたち誰もが他者とひとつになるべき記号なのではないだろうか？ 宇宙に一瞬一瞬の調和をもたらすためにだ」と言って、人間同士がつながることを求める。さらに、「そしてすべての悪なるものは、記号であるわたしたちひとりひとりの関係の不均衡や齟齬から生じる」と、調和のとれていない世界の危険性を訴えている。

ソウト先生は、モヤの出版社に保管された本に「不思議な配列」を感じ、そこに、「象徴的な意味」を見ていた。そして、さまざまな種類や形のものが統一され調和をもった世界にあこがれていた。

このときからすでにソウト先生は、彼があとで引きこまれていく、いろいろなものが統合されたマンダラの世界へ接近しているのではないだろうか。

なぜなら、『マンダラ』（ホセ&ミリアム・アークエイイス著、中村正明訳、青土社、2006）によれば、マンダラは「統合をもたらす技術」（本段落の以下の「」は『マンダラ』からの引用）であり、「さまざまな両極性を調和させ」「相対立するものを再び結びつける錬金術」だからである。

ソウト先生は調和のとれたマンダラ的世界を熱望していたのだ。

「梵語ではマンダラは円や中心を意味する」。そして、「マンダラは、同じ円を初めとする同中心の形から成っている」

こうしてソウト先生は、二つの円から成る記号を見つけると、その記号はマンダラを象徴する睡蓮の花の芯、中心だと考えるのである。

「マンダラの普遍性は中心の原理」であり、マンダラの「中心は永遠の可能性を象徴

している」。そして、「時間の中心は現在である」ため、「池の波紋のように、一つ一つの意識の瞬間はその中心から広がっていき、中心は、自らの形というか型の中に、宇宙のあらゆる物質的・非物質的現象の配置を含んでいる」

中心の原理を知ること、ソウト先生は自分自身という中心に向かい、統合されていこうとするのである。

そうしたとき、混線したような電話がソウト先生にかかる。そこから響いてくる音をソウト先生はオームと聞き取り、それを真実の言葉であるマントラとみなした。

マンダラの世界においては、「^{オーム}OM はすべての音の根源的中心」であり、「この点を通じてすべてが語られ、すべてはこの点を通らなければならない」。つまり、それは「根源的な音節、言葉、ロゴス」なのだ。

ソウト先生は落書きをとおして、真実の言葉であるマントラに到達したのである。

真実を表すはずの詩は「空っぽの排水溝になり果てた」と言い放つソウト先生は、反社会的行為の産物ともいえる落書きに真実を見出した。

ここには、現代社会の言葉に対するメリーノのアイロニーと批判精神がうかがえる。後述するが、メリーノは詩人としてデビューしたあと小説家に転身したのだが、ソウト先生にあるような、言葉に対する不信心はその理由の一つかもしれない。

結局ソウト先生は黒い大きな記号となって、壁に刻印されたのだろうか？

ソウト先生が白い煙につつまれながら消えていく最終場面はSF的だが、メリーノ著“Los libros vacíos”の拙訳「空虚な書物」（『琉球大学欧米文化論集』第66号（2022）所収）の解説で筆者が記したように、メリーノは稀代の読書家であり、少年のころからSFも愛好していたため、この場面にはその影響がみられる。

またメリーノは『ドン・キホーテ正編、続編』（1605, 1615）も愛読書のひとつであると言っている。

ソウト先生が詩や詩人を軽蔑する箇所は、『ドン・キホーテ』や、『ドン・キホーテ』とならぶセルバンテスの代表作『模範小説集』（1613）の一編「びいどろ学士」（拙訳が『セルバンテス全集第4巻・模範小説集』（水声社、2017）所収）のなかで詩人が槍玉にあげられる場面を思い出させる。本作にはセルバンテス作品の影響が色濃い。

「この世の言葉」の解説でも、ソウト先生というキャラクターにドン・キホーテが反映していると筆者は書いたが、今回それはより明確になる。冒頭ソウト先生はスペイン広場で、ドン・キホーテの生みの親であるセルバンテスの銅像を眺めていたが、それはソウト先生がドン・キホーテの分身だと示唆しているような場面である。

従士サンチョ・パンサの役割は、『この世の言葉』では助教のセリーナ・バリェッホが果たしていたが、本作では、落書きの意味の探求に情熱を燃やすソウト先生に食事

や住居の世話など日常生活の面倒をみる編集者のモヤが、目の前にあるものを指して巨人だと叫ぶドン・キホーテに風車だといって現実を知らせるサンチョ・パンサといえる。さらに、ソウト先生が可愛がっていた猫のデリは、ドン・キホーテの旅の仲間であるやせ馬のロシナンテになぞらえられるだろう。

壁に自分の記号を残して、今回も物語の最後にソウト先生は蒸発してしまった。

ドン・キホーテが冒険を求めてラ・マンチャの平原を放浪する遍歴の騎士であるなら、現れては消えまた現れてと、一か所にとどまらず真実を求めて世の中の常識に抗いながらさまよいつづけるソウト先生は、やはり現代のドン・キホーテと言えるだろう。

フローベールやメルヴィルやドストエフスキーやカフカや大江健三郎や村上春樹がしたように、メリーノもこの世界が調和のとれた世界であるために、同時代にドン・キホーテをよみがえらせているのである。

最後に作者ホセ・マリア・メリーノについて記しておきたい。

ホセ・マリア・メリーノは、1941年スペイン北西部の自治州ガリシアの港町ア・コルーニャに生まれ、幼い頃、隣接する州カスティーリャ・イ・レオンの古都レオンに移り住んだ。マドリードで法学を学んだのち、1972年詩人としてデビューしたが、*Novela de Andrés Choz* (1976) 以来、小説家として多数の作品を発表している。*La orilla oscura* (1985)、*El centro del aire* (1991)、*Las visiones de Lucrecia* (1996)、*Los invisibles* (2000)、*El heredero* (2003)、*La sima* (2009)、*Musa Décima* (2016) などである。またここ数年は *Dobles* (2020)、*Noticias del Antropoceno* (2021)、*La novela posible* (2022) とたて続けに作品を発表しており、今日まで創作活動は盛んである。ミゲル・デリーベス文学賞 (1996) やラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナ文学賞 (2004) など受賞した文学賞は数多い。2008年スペイン王立アカデミーの会員に選出された。さらに2013年、*El río del Edén* で国民小説賞を受賞した。そして2021年、作家たちの権利や発展を守る活動に対し、CEDRO賞がメリーノに贈られた。(CEDROはCentro Español de Derechos Reprográficosの略語)

ここに訳出したのは、José María Merino, *El anillo judío y otros cuentos*, Castilla Ediciones, Valladolid, 2005 所収の短編 13 篇中の 1 編 “Signo y mensaje” である。